

---

# 氷の皇子

クラスコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

氷の皇子

### 【Nコード】

N2374BA

### 【作者名】

クラスコ

### 【あらすじ】

私の心は氷に閉ざされた。

カローラ国に住む美少年アダムは傍若無人、傲岸不遜な謎の少年リネンに出会う。魔王的な彼との出会いをきっかけに、アダムは悪夢に引き摺りこまれることになるが……

一方で、北方の帝国ファギナでは冷帝オスクロの諸臣が不審な動きを見せていた。

彼等は願う。炊煙の立ち上るあの家へ帰ることを

## プロローグ（前書き）

ゆるーり投稿したいと思います。

## プロローグ

私は世間からは英雄と崇められているが、己自身を大層な人間だとは思っていない。言うならば少しだけ武芸の心得があるだけの、取るに足らぬ大衆の一人であるようにしか思えない。

しかし人々から期待を負わされている以上、それ相応の期待に応えうるだけの能力は備わっているはずなのだ。その正体は何なのか、客観的に見ればわかる。とも限らない。人というものは内面にも外面にも表れない複雑な事情じみたものを持っている。というのが私の私見だ。

そう、その事情が肝心の私を英雄たらしめている何かなのだ。だが、今の私にはその「何か」を知るだけの能力は備わっていない。さすればこそ、私は己が恐ろしい。彼等は私自体ではなく、正体の定かではない「何か」の方を英雄として崇めているのではあるまいかと。私はその「何か」の傀儡に過ぎぬのではあるまいかと。

ぼくは率直にいつてイケメンであった。昔からちまたでは有名な美少年と誉めそやされてきたし、女の子たちだって黄色い声を上げながらぼくにたかつてきた。なよなよしててまるで女のようなと同年代の男の子にからかわれたこともあるし、人さらいにも合いかけた。

よってぼくはただのイケメンではない。並大抵の人ではしえない、経験豊富のイケメンなのだ。

誰がぼくをイケメンではないと否定できようか。姿見に映し出されたぼくの姿が、なによりもぼくがイケメンであることを雄弁に物語っているではないか。

サラっとした艶のあるブロンド、深緑の瞳、均整の取れた目鼻立ち。いつ見ても素晴らしいシンメトリーだ。あとは年齢を重ねて第二成長期に突入して身長をすらりと伸ばすのみ。

「とつととおめかし終わらせろよ、アダム君」

その時、憎まれ口調のよく透る男の声がぼくの名を呼ぶ。出口の方に目をやれば、目の前では黒髪の青年が腕を組み、堂々と視界を覆うように立っていた。その様と言ったら、酷い偉振りようである。浅葱色のマントを纏ったこの男の名はリネン。彼のルビーのような瞳はぎよる目……という程でもないが、とにかく睨まれたらどぎつい。そして逆立った黒髪（寝癖か？）は彼の気性をそのまま忠実に表しているように思える。無論、顔はぼくのほうがイケメンである。

いや、それよりもこいつはいつからこの部屋にいたんだ。扉の鍵はきっちりかけておいたはずなのだが。

「おまえがあまりに遅いもんだから、待ちくたびれて扉を蹴破ってしまったぜ」

あ、本当だ。ぼくが体を横にずらして彼の背後の床を見てみれば、そこには木の破片がバラバラにまき散らされていた。当時の凄まじさを想像するのはたやすいが、その凄まじさ相応の鋭い破壊音が聞こえなかったのはぼくが思考に耽っていたからかもしれない。いや、有りうるのか？

それにしてもこの男、人の許可もえずになんという強行手段にでているのだ。ぼくは一瞬ぶん殴つてやりたい衝動に駆られるが、この脅威の破壊力と体格差からして逆手を取られるのがオチである。体格のよいこの男の身長を抜くことが、ぼくの密かな願望である。その時には必ず報復を受けてもらおうかな。

「君が修理代払っておけよ、リネン君。そうしたらぼくは君を恨ま  
ずにいられるんだけどね」

ここは旅先の宿。自分の家ではない。

暗にしばらくここで働けと行ってやったのだ。なぜって手持ちが  
底を尽きそうだからね。どう考えたって誰から見てもあの惨状はこ  
いつの責任だしね。

「じゃあ一生恨んでな」

相手はきりつと一切の躊躇なく言い放った。この野郎、そのつも  
りらしい。

ぼくはけちよんけちよんにやりこめたい衝動に駆られるが、急い  
で自制心を置く。ぼくが感情的になったらきつとこの愚かで馬鹿力  
の男は高確率でぼくの魂を狙いにくるに違いないからね。

「あのねえ、リネン君。ぼくは君の為を思っと言ってやってるのだ  
がね」

これを機に彼も更正するかもしれないと思った。もはやぼくの中  
では、彼の存在自体が脅迫である。こいつは武力をもってなにもか  
も解決したがるとんでもないやつだからな。

「ふん、おまえなんぞに助言されるまでもないぜ」

彼は悪魔的な強気的笑みを浮かべる。彼の目力の利いた顔に乗  
せされれば、結構な凄みが放たれる。こいつがこの顔色になる時は  
たいがい不満を持っている時だから、じつにややこしくて面倒くさ  
かった。なんかもうつき合うのが嫌になってくる。

リネンは両拳をばきばきと鳴らし始めた。凶暴な肉食獣のようなオーラが彼から滲み出る。

「この主人を今から潰しにいくか」  
「……………」

訂正。

こいつは魔王だった。

## 1 (前書き)

アダム、罪を負わされる。

ログス・エクシール。それがこの大陸の名だ。

現時点で大陸地図に載せられている国の数はおよそ百三十。その内列強とされる大国が六つある。

物語はその六つの内の一つ、トリア人の支配する国力ローラのある地方から始まる。

リネン、リネン、リネン。

この黒髪の男と会ってからまだ日は浅い。でも今ではどういうわけか、この男と一緒に行動するようになっていた。これが成り行きというやつなのだろう。

ぼくより二つ年上の十五歳らしい 聞いてもないのに彼が勝手に教えてくれた が、その酒豪ぶりはバーで気ちがいを起こしているいい大人よりもたちが悪い。たまに、酒で溺れ死んでしまわないかなーなどと不謹慎ながらも切実に願ってしまう時があるのだが、それ程までとにかくひどいのだ。

ぼくは一体なにを間違っつてこの男と行動をとにもするようになってしまったのだろうか。出会いがじつに最悪だったことだけは記憶に新しいが、今となっては自分の正気を疑ってしまう。

時刻でいうと昼間のあたりだろうか。ぼくはちょうど今、とある宿の周辺をホウキでけだるげに掃いている。いや、正確には掃かされている。

ぼくたちはこの宿に一日だけ宿泊する予定だったのだが、リネンの馬鹿がやらかして悪い意味で長居することになってしまったのだ。罰として科せられたのは、損害費用分の雑用。あてがわれた寝床は物置。

そして肝心のリネンはというと、すべての責任をぼくに押しつけるようにして忽然と姿を消してしまった。まさかこんな形で別れることになるとは、このやり場のない胸のもどかしさをどうしてくれるだろうか。

せめてあいつの頭に一発お見舞いしたかった。さんざん人を振り回しておいてしまいいには放置とか、畜生のやることじゃないか。でもあいつから解放されただけマシと言えるかな。

「ようお嬢ちゃん。掃除とはまじめだねえ」

宿屋の入り口から中年の客らしき男が出てきて、にこやかに、一切の悪意なくぼくに話かけてきた。どうせ宿屋の亭主の娘かなんかと勘違いしているのだろう。はあ、また相手に訂正させなければ。顔がキレイすぎるとこういう損があるのだから。

「おじさん、ぼくは男なんだけど」

「なに！？ それはすまなかつたな」

おじさんはびっくり仰天だ。面倒くさいと言えば面倒くさいけど、ぼくが男だとわかった時の相手の反応を眺めるのも結構オツだったりする。まあ一応ぼくは男ものの服装をしてるから、大体の人には気づいてもらえる。たまに鈍い人や病的にうたぐり深い人が現れると手間がかかるのだけだ。

誤解もあっさり解け、おじさんは町の大通りの方角へと消えていった。

この町には三つの宿泊屋があるらしいが、その中でここが一番ぼくには適当で格安だった。当時の手持ちが三百六十ルーペだとしたら、一日分の宿泊費は食事をつけて二百五十ルーペ。食事なしであれば百九十ルーペ程度に抑えることができる。

ぼくは腹の虫を黙らせて食事なしに甘んじた。無論ケチってるわ

けではなく、出費を抑える為だ。あの男さえいなければうまくやり  
繰りできていたところなんだけどね。あの野郎、ぼくをヒモ同様に  
扱った。

でもこれを好機にあの男との一切の関係が断たれたと思えば、浮  
き立つ心も抑えつけられない。掃除ですら楽しくなってくる。

さつさと扉の分を弁償し、この町から出ていこうではないか。

## 2 (前書き)

プロローグ終了です。

アダムは西方の大国カローラの辺境の村で育った。

トリア人とは、金髪碧眼に白い肌が特徴の人種である。カローラは各国との交友が盛んであるから、厳密に言えば雑多な人種から成っている。

アダムの両親の場合は、父親がトリア人で母親が深緑の瞳の民だ。母親の一族は“特殊な秘め事”を持っているらしく、いにしえにはこの大陸の三分の一程度の大帝國を築いていたという伝承話を聞かせてもらったことがある。もちろんアダムはそんな胡散臭い話など真に受けなかった。

そして六大國の内、最も忌み嫌われる軍事大帝國が一つあった。それが北方の帝國、ファギナ。

数年程前まではカローラとも和平条約を結んでいたが、当時の皇帝クオンロアの崩御をきっかけに破たん。帝國側の一方的なものであった。

爾來 ジライ この二國の間には不穏な空氣が漂うようになり、緊張が徐々に高まりを見せている。國中がそう遠くない日に戦争が勃発すると色めき立っていた。

皇位を継承したのは弱冠十六歳の第一皇子オスクロ。噂によるとこの継嗣 ケイシ は痴愚で位負けした暗君であるらしい。万一そうであるとして、周辺諸國は皇帝の時代に誇った巨大軍隊をそのまま受け継いだ劣等な息子が、下手に自國へ攻撃をしかけてこないか戦々恐々としていた。

カローラは多くの國々と同盟を結んでいる殷賑 インシン な貿易國。軍事力を誇るファギナとの衝突が始まったなら、周辺諸國や各々の同盟國を巻き込んだ大規模な戦争はまず免れないだろう。

ぼくは弁償し終え、ようやくこの田舎の町から出ることに叶った。この七日間は働き詰めだったけど、幸運なことに宿屋の主人はきつぷがいい人らしく、ぼくに袋いっぱい分のパンの耳を持たせてくれた。これだけで二日は持つだろう。

あのリネンに散々振り回された悪夢の三日間も、今となっては本当の意味で夢として記憶に残るのみとなっていた。夢といってもやはり悪夢なのだが、それ以上にあの男から解放された幸福感がぼくの全身にくまなく満ちていた。

あの男の黒い頭を見ないだけでも、どんな飢えや乾きにもめげない精神をもって帰路につくことさえたやすい。なぜって、ぼくはあいつには半分人さらいのような目に合っているのだからね。まさしくこの十日間（実質三日間）がそうだったよ。

思い出すだけ頭を搔きむしりたくなるような最悪な出会い。悪魔的人間性。いや、魔王。

ぼくは今、牧草地の中の整備された一本道を歩いている。早朝の空は薄く澄んだ混じりけのないブルー。両脇には牧人たちの放牧場や家屋が広がっている。昼時になれば牧歌が聞こえてくることだろう。ぼくは実家も同じようなものなんだよなあ、なんてのんきなことを思いながらそれらを軽く眺めた。ほっぺをくすぐるそよ風が程よい温度を含んでいる。

ぼくの家族は平民にしては珍しく、祖父母も両親も兄弟もみな健在。近所の家庭は大体誰か欠けているのだけだね。

十日も家を空けていたのだから、家族はさぞ心配していることだろう。日暮らし歩き通せば翌朝には家に着く予定だ。

それにしても、成り行きといってもどんな成り行きだったんだろう。言いくるめられた感じはしなかったけど。

まあ、とにかくぼくはパンの耳の袋を腰にぶら下げて平和に家に辿り着くだけだ。

## 第1章

『じゃあ、行ってくるよ姉さん』

アダムの母親譲りのグリーンの瞳に、私の姿が映った。私はブロンドにブルーの、見た目だけは立派なトリア人だけれども。

アダムは私の可愛い弟。顔が女の子みたいにとてもキレイだった。彼自身も自分が美形であることを信じて疑わないのだけれども、彼が皆さんの思うような自意識過剰ではないことを私や家族は知っている。ある種の自意識過剰だということだけれど。

『いつてらっしやい』

私はにつこりと笑い、遠ざかっていく弟の背中を見送る。彼は近くの町へ家族代表で買い出しに行くのだ。

『アダム……』

そんな彼に、私は不安を隠せない。

アダムは女の子と見紛う程に可愛い。その可憐な面立ちといい、その背丈の低さといい。過去には人攫いにも合いかけて恐ろしい思いをしているというのに、また町のどこかで変なおじさんに話しかけられたりしたらどうしよう。そう思う都度、私の胸は騒いで落ち着かない。

そして、私は思わず声を上げていた。

『気をつけて……！』

私が数歩進んでそう叫べば、アダムは歩みをそのままに顔を振り

向かせて、優しい顔でこちらに手を振ってくれた。

面差しが母親に似ているアダムが笑えば、春の日溜まりのように温かい。私は彼のこの笑顔を見る度に、恋しいと同時に守ってあげたいとも思うのだ。

これが、アダムと別れた十日も前の話だった。

昼時。

私は冊に腰掛けながら羊の番をしている兄クルムに近づいた。

兄の齢は二十一。ブロンドにやはりブルーの瞳の彼は、父親譲りの穏やかな顔をしている。これも父親譲りの巻き毛が、耳の上でくるとなっている。毛先の跳ねた部分は生れつきというよりは手入れができていないといった方がしっくりとくる。薄手のシャツの胸元はグニヤリと開け、片方外れたサスペンダーはだらしなく腰から太股にかけて垂れ下がっている。

彼が眺める先には、緑の牧草地の上に白い綿毛の群れが緩く移動しているのが見える。ヤギを数頭含めた牧羊だった。兄はそれを眺めながら暇そつにあくびをするのだった。

「お兄さん」

私が横から顔を覗かせて兄に話しかければ、彼はようやく私の存在に気づいたらしい。大して驚いた様子もなく緩りとこちらを向いた。

「なんだい、メルシナ？」

「アダムのことなのだけど」

次第に、兄の顔に翳りができた。

「ああ、もう十日だな」

「まだ見つからないの？」

家業の合間を縫っては、男達は行方不明となったアダムを捜しに出ていた。もちろん町にも搜索届けを出したものの、十日も経って見つからないとなればいよいよ絶望的になってくる。巷では有名な美少年であるから、ちよつと見かければすぐに分かると思うのだけれど。

「残念ながら、お手上げだ」

「そう……」

私はがつくりとし、頭を垂れた。

最後に別れた時の、弟が私に向けてくれた優しい笑顔が忘れられない。まさかあの時の胸のざわつきが、このことを予感するものだったとは。あの時に、私が彼を引き止めておけばよかったのだという後悔が、私を苛んで止まない。

「黒髪の、しかも若い青年と一緒にいたっていう情報ぐらいしか俺達にはないものな」

黒髪と聞いて思い浮かぶ人種といえば、南東の小麦色の肌の種族かルーン人。つまりファギナ人ぐらいしか思いつかない。ファギナといってもファギナ系であろうが、髪が黒い内はまず血が濃いと思っっている。

「せめて、瞳の色さえ分かればなあ。やっぱりファギナの血は碌でもないよな」

「……………」

私は視線をさ迷わせるばかりで、それに関してはなんとも返事をできなかつた。

ファギナの、特にルーン人は私達トリアには嫌われている。他の種族の中にはファギナに恭順を示す者達もいるのかもしれないが、それは大抵帝国に対して恐れを成しているからだ。風の便りでは、帝国は近隣の小国を次々と平定し、国内で勃発する叛乱軍を鎮圧したという。

ファギナの民ですら抵抗するのだから、必ずしもそのルーン人が邪悪だとは限らない。それでも、噂とは不思議なもので、人々は悪評にばかり囚われていた。公平な判断とは、なかなかできないことだ。

「それでも、私はあの子の無事を祈ります」

たとえアダムが誰かに攫われたとして、あの意志の強い彼ならば、きつとどこかで逞しく生きてくれているはずだ。

「……そうだな。希望は最後まで捨てないでおこう」

クルムはそつと私を安心づけるように笑いかけた。

私達家族は、誰一人として欠けたことなどなかった。だから、きつとアダムは帰ってきてくれるはずだ。

願わくは、アダムに神の加護のあらんことを。

アダムが消えてから十日と半分の時間が過ぎた。

私は昨日の兄のように、冊の上に腰掛けていた。ぽかぽかとした日和をぼんやりと仰ぎながら、頭を占めるのは弟のことばかり。

父に、どうか私もアダムを捜しに行かせて下さいと懇願したけれども、お前まで攫われてしまっただけは困るから駄目だ、と言われてしまった。父はきつと、私が女であるから非力だと思っているのだ。

今朝も兄クルムが町や野原の方を捜しに出向いたのだけど、やはり見つからなかったらしい。兄の顔にも諦念の気配がちらつき始めていた。

私は堪らずスカートの腰部をぎゅっと握り、眉間に力を込める。

アダムはきつと帰ってくる。たとえ皆が諦めようとも、私だけは最後まで信じている。

「おい、そのの」

その時、私ははつとして顔を向けた。突然したのは、聞き馴れない響きを帯びた粗雑な男の声だった。

「あ……！」

顔が合い、私は開いた口が塞がらなかった。なぜなら、そこにいた客人は黒い髪に深紅の瞳の 純粹なファギナ人に他ならなかったからだ。私はあまりの衝撃で冊から下り、そのファギナ人から距離を取っていた。

そのファギナ人は意外と若かった。浅葱色のたつぷりとしたフードを被り、マントで身なりは隠されているものの、顔だけは堂々と覗いている。髪はフードの縁からひよっこり顔を出していた。

一目見て凡人ではないと思えた。纏う空気は物々しく、そのきついぐらいの深紅は不遜の一色で塗り込まれている。彼からはルーン人故か、そこらの庶民程度では到底真似できない品格が備わっているように思えた。

ルーン人って、みんなこんなに凄いのかしら？

ルーン人は冷静で賢い種族だと聞くのだが。

ファギナ人もヘルーン人をこれまでに見たことがないわけでもない。しかし、田舎に住んでいるということもあり彼等と一言も話すような機会はなかったし、そればかりか今以上に彼等を間近にしたことなどない。

「何だ、その態度は」

相手は何が楽しいのか、口元に笑みを浮かべる。どうも彼は普通に口を動かしていてもよく響く声の持ち主らしい。

そこで私は思い出す。相手は飽くまでもお客人。確かにこの避けるような態度は無礼そのものである。

「い、ごめんなさい」

私は慌てるあまり不格好にもそのまま冊を跨ぎ、そして外へと降り立とうとしたその瞬間　バランスを崩してすと地面に転がってしまった。普通に痛かった。

「ふーん。愚かではあるがなかなか見応えのある腰つきだ」

どこからか空耳のようなものがしたけれど、私は地面に膝をついたまま呆然とするのみ。その間、私は今更のようにアダムと一緒に

いたというファギナ人の話を思い出す。まさかと思い、私は急いで立ち上がり彼を見た。

「あなた、もしかして私の弟と一緒にいた人？」

「弟？　ああ成る程、あれはお前の弟か」

相手はすんなりと納得し、にやにやと笑い出す。

まさか、弟の身に何かあったのだろうか。

「まったく、小生意気ではあるが何せあの顔だ。いたぶり尽くすにはちょうどよい玩具だったな」

私の体は一気に凍りつくようだった。この男はその笑み一つだけで冬を到来させるような、冷ややかな何かを持っていた。

ということは、アダムはこの十日間この男に屈辱を受け続けたということになるのか。まさか、そんな罪が許されるはずなどない。考えるだけで、私は目眩に襲われそうになった。

「ア、アダムはどこに……」

朦朧とする意識を振り払い、私は何とか声を絞り出した。せめて、あの子の居場所だけでもと。

「搾れるだけ搾り取り、あとは適当なところに捨て置いてやったぞ」

私は瞠目した。

有るうことが、相手は一欠片の後ろめたさもなく平然と言っていたのだ。私は、ここまで冷酷な人をこれまでに見たことがない。

「酷い人……」

でも、その物言いからはまだアダムが生きているとも取れる。人攫いの男を相手に、私一人では無理だ。ここは兄か父の辺りを呼び、何とかして弟の居場所を聞き出せないものか。私は少し離れた馬小屋の入り口付近に、祖父の姿を見かけた。

「女、俺の許可なくそこを動くなよ」

望みは断たれた。制限をかけられ、私の体は強張る。まさか、私まで攫われたりするのではないかと、鼓動が激しい。あのマントの内に、凶器を潜ませていたのだとしたら。

彼は私の目前で歩みを止めると、マントの隙間からぱつと両腕を伸ばした。そして　　その手袋の嵌めてある焦げ茶色の両手が、私の胸を鷲掴みにしていた。

「き、きゃあああっ！」

私は有りつたけの悲鳴を上げ、彼の頬をばちんとはたたいた。変態だ、この男は変態だったのだ。

「っっ……」

その衝撃で彼のフードが脱げ、首から上があらわになる。

ぼさりと崩れたような髪は、やはり艶を帯びた黒髪。改めて目の当たりにしたその顔は、この田舎には場違いのように思えた。

「メルシナ！」

私の悲鳴に気がついた祖父が、慌てて走り寄ってくる。

「おじいさん！」

祖父のフレッドは私の体を抱き寄せ、落ち着きなく彼から数歩遠ざかる。祖父もまた彼の顔を見て、驚愕した。

「あ、あんたは、ファギナの人間じゃないかっ」

そんな必死な祖父とは反対に、彼は聞こえているのかいないのか、マイペースに頬のはたかれた部分をさすっている。余程気に喰わなかったのか、眉を深く顰 ひそめていた。

「こら、答えんか！」

「黙れ」

瞬間にした冷えた声に、祖父も私も呆然とした。

「な、何じゃと？」

祖父は間の抜けた声を出す。

彼は、ぞつとするような笑みを浮かべていた。それも、凄絶なまでの狂気にも似た。私達はそれだけで竦み上がった。

「この俺の好意を無下にすると。そこな女、余程身の程を弁えておらんようだな」

じろりと睨みつけられ、私は物の見事に射竦まれる。けれど、なぜ彼にそこまで言われる筋合いがあるのだろうか。まさか、ファギナの貴族のご令息だなんてことがあるのだろうか。平民でここまで高慢な人物がいたなら、この上なく恐ろしいことだ。だけど、それも一瞬のことだった。

「何を言つとるんじゃ、あんたは」

彼は祖父に視線を移すと、暫くの沈黙を置いてふつと笑った。額に垂れた前髪を後ろに撫でつけると、すっきりと整った顔を改めてこちらに向ける。その白く穢れない面貌は、驚くべきことに先程までの人物とは全く別の人間のように見えた。やはり、庶民というにはあまりにも瞳の刺激が強すぎる。

「まあ落ち着きたまえ、ご老人。俺はご覧の通り生粋のファギナ人だが、何も揉め事を起こしてきたわけじゃない」

「も、揉め事って、私の胸を掴んだじゃないですか」

「何い!？」

祖父は今にも目ん玉が飛び出さんばかりに驚く。当然だ、自分の孫娘が破廉恥な目に合わされたのだから。

私は、いまだに顔が熱かった。彼がなぜ出し抜けにあんな変態的な行動を取ってきたのか、私にはさっぱり分からない。でも、あの問題をこのままにしておいたのではあまりに身勝手すぎる。

「今さっきのはそういうことじゃったのか……何と破廉恥な」

「はあ？ この俺の寵をもう少して受けられるとこだったんだぜ、その娘は。貴様等の民族はもっと素直にならんと損だぞ」

一体どんな寵の儀式をしようとしたのだろう、彼は。

「我等はトリア、ここはトリア人の王が治める国家、カローラじゃいー」

名前で呼ばれなかったことがよっぽど腹立たしかったのか、祖父フレッドはことさら民族や母国の名を挙げながら彼に詰め寄る。私はそんな怖いもの知らずな祖父が凄いと思うと同時に、頭の血の上りすぎでぼっくり逝ってしまわないか心配だった。

しかし祖父に迫られても、彼は何一つ変わらぬ態度で平然と構えているのだった。

「まま、ご老人よ。俺も無益に年寄りに手を挙げたくはないのだ。落ち着かんか」

もし利益があれば、手を挙げていたのだろうか。

「む、そういえばわしの可愛い孫息子が黒髪の男に攫われたと聞く

が、おぬしに違いないわい！」

「何だ、じいさんか。アダムちゃんは実に従順で賢い子だったぜ」

彼はくつくつと笑った。

そうだ、アダムはこの男に悪夢を見させられたのだ……。彼の犯した過ちは外道。死刑に値するぐらいの。

「悪魔めっ、わしの可愛いアダムをどこへやった！」

祖父は憎々しげに叫んだ。祖父が彼に掴みかかりそうになったので、私は祖父の老体を気遣って宥めた。そんな事態になっても尚、男は顔色一つ変えない。私は、全てのルーン人が彼のような性格だったら嫌だと思った。

「悪魔か。俺の国では誉め言葉だ」

挑発するような言い草で、相手は薄ら笑う。祖父に代わって私が出た。私とて怒りを全く覚えていないわけではない。

「アダムは、無事なのですね？」

私はぎゅっと拳を作る。だからといい、怒って相手の機嫌を損ねるようなことがあれば会話はいつまで経っても始まらない。彼が傲慢な性格だと分かった以上、こちらから妥協せざるを得ないのだ。全てが、アダムの為だ。

「俺はその為にわざわざこんな片田舎にまで出向いてやったんだぜ？」

相手は意味深げな笑みを浮かべる。

「え……どういうことですか？」

「それを知りたければ、まずこれまでの不敬を俺に詫びな」

「何じゃとー！」

祖父が憤怒の声を上げる。

「無論じいさんもだ。まさか、忘れたわけないよなあ？ あんたが覚えているかいないかで、アダムちゃんの命運がかかってるってことだ」

「この小童 こわっぱ めが……」

祖父は口惜しそうに彼を睨むけれど、弱みを握られてしまった私達になすべなどなかった。

それをいいことに、彼はじっくり満足げに私達を眺め始める。

「さあどうする。俺は気が短い」

彼は意地悪く、渋る私達を急ぎ立ててきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2374ba/>

---

氷の皇子

2012年1月10日01時47分発行